□巻 頭 言：前日本都市計画学会副会長、松波計画研究所代表　松波龍一

第７号(平成２５年９月１５日)

広島のまちづくりに羅針盤は？

街は誰がつくるか

広島市の戦災復興は、とてつもない営為であったと思う。２０数年をかけた１，１００ヘクタールにおよぶ土地区画整理事業によって、現在のデルタ市街地の根幹ができあがった。その後の基町地区再開発、段原地区再開発といずれも１０～３０年をかけた大規模な事業がつづき、まさに都市をまるごと作り変えるような仕事を営々と行ってきたのが広島である。このことは誇ってよいと思う。

しかしそのために、なんとなく都市は巨大な公共事業によって作られるものという感覚が身についてしまったのではないか？　それで、街づくりのビジョンなども、いきおい公共投資型あるいは役所への陳情型のビジョンになりがちで、ある種の出来上がり予想図にもとづいて、誰かが全体を一気に作り上げることを前提としたようなものが多い気がする。

このところ、大規模な跡地開発にコミットすることが多かった。そこで考えさせられたことは、そういうことである。

北米の都市の地下街

と言いながら思い出すのは、北米のさる大都市のダウンタウンに世界最大といわれる地下街を訪ねたときのことである。

総延長３０ｋｍとも３５ｋｍともいわれる空調の整った地下街がくもの巣のように張り巡らされていて、２つの鉄道駅、７つの地下鉄駅につながっている。ホテルやショッピングモールだけでなく、銀行から大学、博物館、ホッケー場、はたまた教会までがこれにぶらさがっていて、たいていの用が地下で足りてしまう。

マスタープランはない！

このすさまじいネットワークを作り上げた都市計画というのは、すごい。さぞかし緻密な議論にもとづいたマスタープランがあるのだろうと思って質問した。「将来計画があれば、見せてもらえませんか？」

そのとき、蝙蝠傘をステッキ代わりにしながら案内してくれた市の担当幹部の説明に、いたく感銘を受けた。「ほとんど民間が勝手にやっていることなので、全体計画というのはありません。この先どうなるかは神のみぞ知るということです。市がやったのは、地下街の理念にもとづいて道路の地下占用許可の基準をつくったことだけです。それで２０年ほど放っておいたら、こんなネットワークができました。」

あまりに強く感銘を受けたので、わたしの記憶はだいぶん誇張されているかもしれないが、ここで強調したいことは、以下の３点。

① このインフラをつくったのは民間事業である、②公共側は地下街の接続を誘導する仕組みをつくっただけ、③２０年間さまざまな主体の思惑やその時々の状況にあわせて個々の事業が積み重なった結果、ネットワークが「できてしまった」。

マスタープランの新しい形

いまの時代にマスタープランに求められる内容は、戦災復興から高度成長期に必要とした「出来上がり予想図」のようなものではないかもしれない。それならどんなものか、と聞かれてもむつかしいが、おそらくもっとも重要なのは理念の共有という役割であろう、とは言える。

どうも、都市計画の理念というのはあまり信用されていない。便利言葉を連ねただけの、身体感覚から遊離したようなものが多いせいでもある。きれいごとはそれとして、現実の社会はもっ

と複雑でどろどろしたものだ、と棚上げしてしまうのが賢いやりかただと思われているふしがある。
しかし、信頼に足りる理念と、それを実現するための仕組みが構築されてはじめて、長年の風雪に耐えて実効性をもつ計画になるのではないか。なぜかというと、都市を公共が一気につくる時代は終わったからである。
　あまり賢くならないで初心にもどり、心に響くような、あるいはみんなの想像力をかきたてるような目標をさぐる努力をしよう。
こういう市民的なトレーニングがこれから求められると思う。そうでなければ、単に絵に描いた餅をまきちらすだけで無為に時代を経ていくことになる。その間、広島の街は羅針盤もないまま、さまざまな主体の思惑とその時々の状況に翻弄されながら、混乱していくばかり・・・とならないとも限らない。

第２８号（平成２９年3月１５日）

観光とまちづくり

　観光による地域振興というのは、なにも今に始まったことではなく、古くからのテーマである。実際にそれで大成功した地域の例もいろいろ喧伝されてきた。それらの成功例を分析して観光がまちづくりに与える効果は次の３点である、というのが定番のようだ。
　（１）経済的な活性化　　（２）交流人口の増加　　（３）住民意識の変化

　実は、こういう整理学が観光の本質をはずれて、観光に力をいれてもまちづくりにつながらない原因になっているのではないか？　結果的にこういう効果があったということと、こういう効果を狙えば成功するということとは、もともと関係がない。さらに言えば、なにをもって成功と言うのかという思想的な根拠が薄弱で、現在のパラダイムにどっぷりつかった項目建てであることが、ちょっと気持ち悪い。
　少なくとも、これでは順序が逆である。まず期待すべきなのは、住民意識の変化であるはずだ。

　広島の郊外に、さる高名な大銀杏を見に行った。さる神社の境内にそびえる樹齢１１００年、高さ４８ｍ、根回り１０．６ｍという堂々たる銀杏である。プチ観光名所にもなっていて、町内の案内図に必ず記載されている。
　仰ぎ見て周囲を見渡すと、NTT の電柱が境内のすぐそばに立っていて少し傾いている。電話線が樹冠の下を斜めに横切っている。神社本殿の裏山には、石積みを模した化粧型枠のコンクリート擁壁がそそり立っている。入り口には錆びて穴のあきかけたトタン屋根の駐車場が無造作に放置されている。
　これらに関わった人々が悪いとは思わないが、どの人もこの神々しい大銀杏に対する慈しみの気持ちをもっていなかった、というのがよくわかる光景である。これでは、たとえ大勢の観光客が訪れてたくさんお金を落としてくれたところで、「成功した」とは言いたくない気がする。
　案内図に記載したり、駐車場の整理員を配置したり、記念の土産物を考案したりする前に、もっとやるべきことがあったのではないか？
　上の（１）（２）（３）という順序づけは、そのことを忘れさせてしまう。

　たとえば、ある集落のお宮は小さな祠が２つ並んでいるだけのちっぽけなお宮である。しかも小高い山の中腹にあって急な階段を１２０段も登らなくてはならない。
　信心深い、あるいは伝統を重んじる村人たちは、感心なことに年に何度も日を決めては清掃活動を続けている。しかし、最近はみんな年だし、しんどいからそろそろ年に１度にしたらど

うか、といったような話が出始める。
　そこへある日、町場の人たちがやってきて、「いいなあ、このお宮は」「こういう森の中で、いい雰囲気だなあ」「村の人たちがせっせとお守しているのも、いい感じだなあ」といったような、どちらかというと無責任な感想を述べる。
　そうすると、村の人々は「あら、嬉しい」と思うだろう。嬉しいから、やはりきちんとお守をしよう、という気にもなるだろう。その嬉しい気持ちは、お金では買えない。

　嬉しいから来てほめてほしい、というのが受け手からみた観光である。
　一方、行く側からみれば、自分たちの日常と異なる体験をして、ショックを受けたり、励ましを得たり、新しい世界の見方を発見したりしたい、というのが観光である。
　この双方がうまく成り立つようにするというのが、本当の観光振興ではないか？
　ほめてもらえるように、ああしよう、こうしよう、というのが“まちづくり”の始まりであり、そういう意味ではまさに観光と“まちづくり”は一体のものだ。いきなり、ターゲットをどうするか、何ヶ国語の表記がよいか、どこの代理店と提携すればよいか、などと浮き足立った思案をしたところで、“まちづくり”は始まらない。
　わたしの“まちづくり論”は、ナイーブ・アートのようなものかもしれないが、こういう気持ちを忘れないようにする勇気をもたないと、“まちづくり”はどんどん如何わしいものになる。

　田舎町の真ん中の駐車場に誇らしげに建てられた大きな観光マップ（そこにはでかでかと○○観光協会のクレジットが記され、マップの情報はたいてい古くなっていて廃業したお店が載っていたりする）や、上げ膳据え膳の田植え体験イベントなどを見ると、実に情けない気分になる。こういう風になってしまう力学が奈辺にあり、どうすれば本来の観光と“まちづくり”を取り戻すことができるのかを冷静に解き明かすことが、研究者やコンサルタントなどの専門家の役割として求められている。

第１５号(平成２７年1月１５日)

□ 特別寄稿

広島のサッカー・スタジアムに思う

ウィーン国立歌劇場

　ウィーンにある国立歌劇場のホールは、その豪華絢爛さで有名であるが、１，７００席＋立ち席５６０と、スケールもでかい。しかし、ここを訪れてもっと驚くのは、ホールを含む建物自体の巨大さである。
　平面図で測ると、１階の床面積だけでその「でかい」ホールの９倍を越える広さである。４階か５階建てらしいので、延床面積でいえば、おそらく２０倍は下らないであろう。
　そこに、メインホールのほか、大きなステージが３つといくつものリハーサルステージ、２００～３００人ホールが３つ、バレールーム、ティーサロン、その他諸々の小部屋やロビーがたくさんあって、歌劇場を構成している。それらが寄ってたかって「オペラ」というものを生産し、メインホールはその蛇口のひとつにすぎないのである。
　この歌劇場は、豪華さや客席数ではなく、そのバックヤードの広さが命なのであった。

バックヤード

　文化というものは、予想外に地域との関わりが深く、それ自体が経済やインフラを含めて大き

な地域開発効果を発揮するものである。そのためには、多様な機能をもつバックヤードによって厚みと広がりが得られるようになっていることが重要だ。
　サッカーを観戦するスタジアムがひとつあれば、それでサッカー文化が育つというわけでもないと思う。

サッカー・スタジアム

　正直にいえば、わたし個人はサッカーにはそれほど興味がない。とはいえ、サッカーが好きでしょうがないという人たちが、広島にもちゃんとしたサッカー・スタジアムを作ろうというのは、慶賀すべきことだと思う。
　その際、まず議論してほしいのは、広島でサッカー文化を盛り上げていくために何が必要なのかということであり、それをわたしのような一般市民にも理解できるように、丁寧に主張してほしい。
　あえていえば、スタジアム本体の収容人員とか、年間の稼動日数などというのは枝葉末節のことがらである。ましてや、どこに作るのかということは、スタジアムやそのバックヤードの複合性をどう考えるのか、地域開発効果をあげるためのシナリオをどう描くのか、というような諸般の事情で決まるのであって、けっして場所選びが先行するわけではない。
そういう本末転倒の議論の運び方では、ウィーンの国立歌劇場は成立しなかっただろう。

世界一のスタジアムを

　それから、できれば世界一のスタジアムを作ろう、というような夢を語ってもらえるとありがたい。
　規模とか、豪華さとか、そういうことではない。では、何をもって世界一を目指すのか、ということをあれこれ言い合うような機会があれば、さぞかし前向きの場になるだろう。たとえば、端正な美しさというのでもよいし、あるいは驚くほどの集積度とか、周辺の自然のすばらしさとか、用途の多様さとか、目の覚めるような眺望とか、充実したサッカー教育とか・・・・
そういう発想を培っていくことが、実は地方都市の主体性、つまり地域主権を発揮していくのであって、ナショナル・スタンダードに照らして身の程を選ぶとか、国庫補助をあてにできるような内容を賢く工夫するとかいうことが、広島の誇りに結びつくわけではない。

第１８号(平成２７年７月１５日)

被爆７０周年特集―４

○特別寄稿

被爆７０年の広島に向けて

　最近、「日本版･･･」というのをよく聞きます。日本版 NSC、日本版 ISA (NISA)、日本版 SOX 法、日本版 NIH、日本版 CCRC、日本版 CSI、ナーシング・スキル日本版、日本版 SBIR・・・・。
　NISA 以外はすべてアメリカにお手本がある制度や仕組みであって、もとの名称に「日本版」をつけたもの。なかには日本版 401k などと、米国内国歳入法の条項名をそのまま使用したものまであります。
　この「日本版」という接頭辞を見るたび、わたしはその卑屈さに涙を禁じえません。
　なにかよくは分からないけれど、欧米で検証ずみのものらしいから、たぶんよいものなのだろう、と感じてしまう自分が悲しい。

・・

　仏文学者の内田樹は「日本辺境論」で、日本人は古代からずっと華夷秩序の中に身を委ねて、価値基準を外に求めてきた、これは「漢委奴国王」から２千年もそうやってきたことで、もう変えようのないことであるから、そのことをポジティブにとらえて未来の可能性を探ろう、というようなことを言っています。
　内田さんは、要するに、泣かなくてよいと言っているのですね。

この辺境論には、合点のいくことがたくさんあって、大いに膝を打ったのですが、「変えようがない」には疑問をはさみたい気分があります。

たとえば、漢委奴国王の前の縄文時代は１万年も続いています。わが祖先は１万年間、津々浦々に小さな集落を営み、数百キロにも及ぶ交易ルートを巡らせ、お互いに支え合って暮らしていたのでした。競争も侵略もなく、おそらく華とか夷とかいうコスモロジー(宇宙論・世界観)とは無縁だったでしょう。変わったのは、たかだかここ２千年のこと。

江戸中期に豊後の三賢人のひとりといわれた思想家三浦梅園が、生涯郷里を離れず、長崎遊学と伊勢参りをしたほかは江戸にも京にも行ったことがなかった、という話がわたしは好きです。国東半島の先、安岐町の旧居を訪ねると、自筆のメルカトール図法世界地図や精巧な天球儀が当時のまま置いてあって、とても僻地の研究室とは思えませんでした。

近世の幕藩体制は、少なくとも国内的には、価値基準を中央に頼らず自分でつくりだすという気概を、地方に醸成していたのでした。

・・

広島が平和都市の宣言を毎年繰り返しながら、常に目指してきたのは、辺境意識からの脱却ではなかったかと思います。世界の恒久平和などという目標理念は、東京が地方を照らし、地方都市がその周縁部を照らし、基幹集落がそのまた周辺部を照らす、というようなヒエラルキー感覚からは出てきません。思わず他の都市と比較してしまうような癖とも無縁のものです。

広島がこうした崇高な理想を掲げた以上、都市としての存立の意義やマナーを東京とかニューヨークから与えてもらうのではなく、自ら考えて主張し実践しなくてはならない。そのためには、どこかで思考中断していないかを、常に緊張感を持ち胸を張って問い続けなくてはいけません。どこかにスタンダードを求めていないか、前例がないから不安だと思っていないか、「国策」だから知らないなどと逃げていないか・・・・・。

７０年間、これらを問う作業を続けてきたはずなのに、最近ちょっとタガが緩んできたかな、と思う人もいるかもしれません。節目の今年は、あらためてタガを打ち直し、一層頑固に市民一人ひとりが問い続けて行くことを再確認する機会にしたいものです。